

弥生時代・古墳時代のムラ ゼニヤクボ遺跡

ゼニヤクボ遺跡 いさづ 蘭生町・都祁小山戸町

ゼニヤクボ遺跡は、弥生時代から古墳時代前期ごろにかけての集落の遺跡です。奈良盆地の東側に広がる大和高原の中ほど、蘭生町、都祁小山戸町にかけて位置し、都祁地域の中心的な集落跡と考えられています。

これまでの調査 最初の発掘調査は、昭和55年に並松小学校の増改築に伴って実施されました。その後、平成13年までに11次にわたる調査が行われ、その調査面積は、およそ10,000㎡になります。見つかった遺構には、弥生時代～古墳時代前期の堅穴建物、掘立柱建物、埋葬施設の周りを四角く溝で区画した弥生時代の方形周溝墓、その他に溝、土坑などがあります。奈良～平安時代の遺構には、天皇や高級貴族が夏に使う氷を貯蔵した氷室と思われる土坑があります。夏でも涼しい高原の気候を利用したのでしょうか。

つげやまのちみち 都祁山之道 ゼニヤクボ遺跡のある都祁は、大和高原のなかでも特に平坦地が多い地域で、奈良時代には東国や伊勢方面へ通じる「都祁山之道」が開かれています。これまでの発掘調査で出土した土器の中には、東方の影響を受けたと

思われる形・文様をもつものもあり、都祁地域は古くから大和と東国をつなぐ交通の要所であったと考えられます。



ゼニヤクボ遺跡の発掘区 1/6,000



ゼニヤクボ遺跡と周辺の遺跡位置図 1/25,000

ゼニヤクボ遺跡について 今までの調査で見つかった遺物や遺構からわかるゼニヤクボ遺跡について、時代ごとに見ていきましょう。

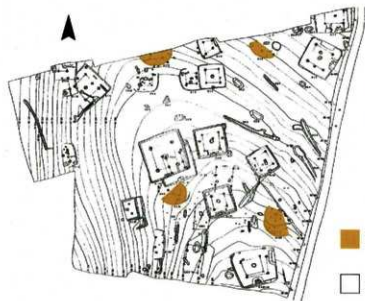
縄文時代 ゼニヤクボ遺跡からは、縄文時代早期（10,000～6,000年前）から晩期（3,000～2,300年前）にかけての遺物が出土しており、一番多く見られるのは、早期の中頃のもので、土器、石器のほとんどは、遺跡南側の斜面に堆積した縄文時代の包含層から出土しました。ゼニヤクボ遺跡の西側にある高塚遺跡でも同じ時期の土器、石器が多く出土しています。このことから、縄文時代の都祁地域に人々が生活していた様子はうかがえますが、残念ながら住居跡などはまだ見つかっていません。

弥生時代 弥生時代になると、ゼニヤクボ遺跡は都祁地域の中心的集落として発展していきます。弥生時代前期（前3～前2世紀）の遺構は見つかっていませんが、土器は出土しており、稲作の文化が早くから都祁地域に伝わっていたことがわかります。多くの竪穴建物などが見つかるのは、弥生時代中期（前2～後1世紀）と、後期後半から古墳時代前期（2～4世紀）にかけての2時期です。中期の竪穴建物の平面は円形ですが、後期には平面が方形・多角形に変わります。また、中期の方形周溝墓も見つ

ています。出土した土器には壺・甕・高杯などがありますが、その中でも口縁部の内側に棒状の浮文が貼り付けられた壺、台がつく形の甕、口縁部が受け口状になる甕などは、近江や東海地域などの影響を考えさせるものです。

古墳時代 弥生時代後期から営まれた集落は、古墳時代前期まで続きます。建物の数も増えて最盛期を迎えますが、古墳時代の中期（4世紀後半～5世紀後半）には、集落は他の場所に移動したようです。

ゼニヤクボ以降の都祁 古墳時代中期から後期（5世紀末～6世紀末）の集落は、ゼニヤクボ遺跡より東の白石遺跡、北東の中笠遺跡などで見つっています。ゼニヤクボ遺跡の東には、直径40mの円墳・三陵墓西古墳、全長110mの前方後円墳・三陵墓東古墳があります。これらは都祁地域の古墳の中でも特に大きな古墳で、日本書紀に記す「**園鷲**」を治めた有力者の墓と考えられています。古墳時代中期以降の都祁の中心は、この2基の古墳の周辺に移った可能性があります。



第1・2次調査で見つかった竪穴建物



棒状の浮文で裝飾された弥生時代中期の壺

- 弥生時代中期の竪穴建物
- 弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物

都祁村教育委員会『ゼニヤクボ遺跡-弥生・古墳時代の集落-』掲載図を一部改変